

子どものワクワクやドキドキにワクワクする大人の存在

私は大学では機械工学を学び、機械設計の仕事を経験していましたが、まさにご縁があってと言うべきか、縁もゆかりもない幼児教育の世界に飛び込むことになりました。同級生からは「幼稚園・保育園？子どもと遊んでいればいいんでしょ？それが仕事なんていいよね。」といった無理解からの冗談交じりの言葉を掛けられたこともありました。しかし、わからないなりにこの世界に身を置く時間が長くなるにつれ、私が感じたことは、「子どもたちが幼稚園や保育園の生活の中で体験していることって、社会人になってから必要なことそのものじゃないか」ということです。

砂場で遊んでいるとき1つにしても・・・

- ・誰からともなく「川を作ろう!」と声が挙がる【提案】
- ・水を持ってこようと、水を入れられそうな道具を探して選ぶ【役割分担】【思考】
- ・たくさん入れられるものがないと思ってたくさん水を入れたものの重たくて持てない⇒手助けを求めに行く【試行】【諦めない気持ち】【交渉】
- ・2人でも持てない⇒小さい容器に移し替えて持っていくことを考える【発想】

と、遊びながらも、今ある道具で、今いる人員の中で目的を達成するにはどうすればいいか、思考を巡らせているわけです。もちろん、ただ子どもたちを遊ばせておけばいいというわけではありません。2人じゃないと持てない道具が園内にあることで自然に友達との共同的な関わりが生まれるだろうな、意図的に狭いおまごスペースを作ってみるとより深い友達の関係性になるかも・・・などとそのとき育ってほしい姿に応じて保育者が環境を再構成していったり、うまくいかない場面を見極めて必要な援助をしていったりするわけです。

川を作りたいというのはさながらプロジェクトです。プロジェクトを達成するために、必要な工程は何かを考え、それぞれができる役割を果たし、うまくいくための最善を尽くすわけです。「川を作ろう!」と言い出したプロジェクトリーダーはたくさんの人手が必要なので、川を作るということがどんなに魅力的で、価値あるものなのかを情熱的に語って仲間を集めます。ただ、みんなバラバラのことをされても困るので、頭の中に思い浮かんでいるプロジェクトの全体像を共有できるように言葉や身振り手振りでなんとか説明をしようと思います。「ここに山を作って、そこから水を流して・・・」作業が進まず工程が遅れていると感じ始めると、「〇〇くんも呼んでこよう」とミッションに共感してくれる適材適所な人材を引き入れます。

プロジェクトリーダーは自分が作業をしながら、みんなの作っている様子もちらちら横目で確認をします。そうすると自分が思い描いている設計図とは異なる作業をしているメンバーを見つけます。そこで、「ちょっと!!違ってる!」と強い口調で迫ると、メンバーがやる気を損ねてどこかに行ってしまうことは想像がつかず、怒りをぐっところえながら「ここ、どうするの?」と否定的な言葉を避けて質問してみると、自分のイメージよりもっと面白そうなアイデアを話してくれて、もっとメンバーの一体感が増していく。 *****



人によっては「責任ある仕事はできるだけ避けたい」「仕事をいかに頼まれないようにするか」という思いを持つことも少なくありません。そのたびに、乳幼児期の「とりあえずやってみよう!」「うまくいかなければ、違う方法を考えよう!」という有能感や自己効力感をもっと大切にしていかなければ、と痛切するわけです。

子どもが主体的であることは、子どもが自分を取り囲む世界を肯定的に捉えていくことから始まります。同じものを見ていても感じ方は人によって違います。同じ出来事に出会っても、「あ、なんか面白そうだな」と思うのか「自分には関係ないことだな」と思うのかは、心の眼での見方によります。子どもが肯定的に世界を捉えるためには、周囲の大人が子どもを肯定的に見ることが大切です。子どもがワクワク・ドキドキする姿に大人がワクワクする。「白い花が咲いてる!」「ほんとだ、きれいだね」「あ、あっちには紫のお花もあるね」と、子どものワクワクを感じ取り、大人も一緒になってワクワクを広げていくことで、子どもの興味も相乗的に広がっていきます。

子どものすることや見つけたことに注いだ大人の興味や関心が、子どもの興味や関心を一層に膨らませ、もっと知ろう、もっと関わろうという原動力となります。これからも保護者の方と一緒に、子どもたちの世界を一緒に楽しみ、ワクワクを広げていきたいと思います。